

科学研究費助成事業（特別推進研究）研究進捗評価

課題番号	21000010	研究期間	平成21年度～平成25年度
研究課題名	ゲノム伝達の中核にある染色体動原体の方向性を決める分子機構		
研究代表者名 (所属・職)	渡邊 嘉典（東京大学・分子細胞生物学研究所・教授）		

【平成24年度 研究進捗評価結果】

該当欄		評価基準
○	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（評価意見）

部分的に軌道修正は見られるものの、当初計画していた内容は達成されていると考える。特に、動原体の一方向性の決定がセントロメア中央領域の接着によって決まっていることを明らかにした点、シュゴシン・オーロラキナーゼのセントロメア局在機構の解析を通じてセントロメア形成機構を解明した点及びコンデンシンの解析を通じて染色体を形作る制御機構を明らかにした点は高く評価できる。また、研究成果としてまだまとまってはいないものの、癌細胞でシュゴシンの機能低下が見られたという研究成果も注目に値する。残された大きな課題は、マウス生殖細胞からの動原体因子の同定、相互作用因子の同定及びノックアウトマウス作成であり、これらに成功すれば、染色体動原体の方向性を決める分子機構に関して、期待以上の成果が見込まれる。

【平成26年度 検証結果】

検証結果	本研究課題は、研究計画最終年度前年度応募により同研究代表者による新規特別推進研究を平成25年度より開始したため、平成24年度末に終了した。平成24年度に行われた研究進捗評価の時点で、既にオーロラキナーゼとシュゴシンの相互作用と、コンデンシンの作用に集約される優れた成果を上げていた。その後の本研究課題の研究の進捗には物足りなさがあるものの、本研究期間全体を通してみると、当初目的に対して期待どおりの成果が得られたと評価できる。
A	